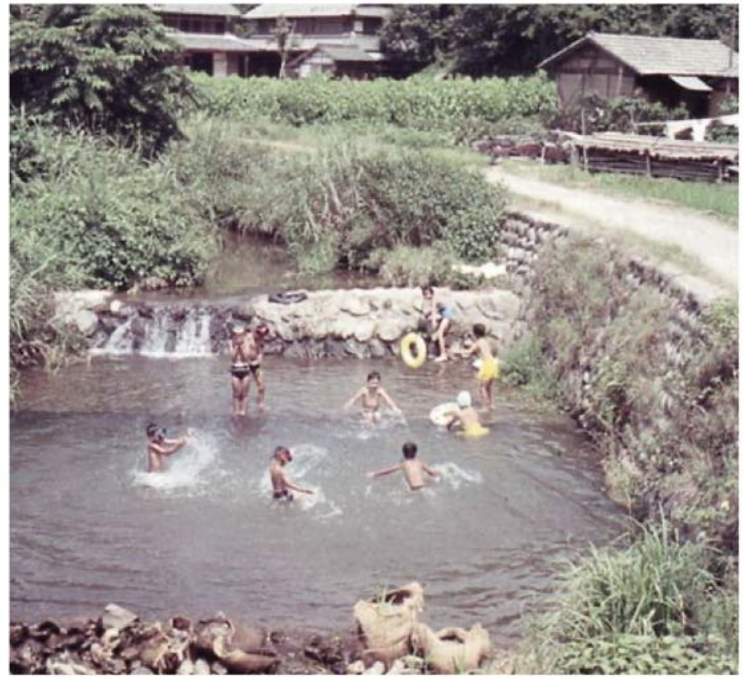
第4回

ていねいな暮らしのあったころ

佐野一彦の撮った伊深の里山

写真は、大洞川での水遊びの様子です。堤防のふちは子どもの腰くらいの深さがあり、水遊びの格好の場所でした。ふちには水がたまるように、石を入れたカマスなどでせきが作られています（上の写真手前）。大人が子どものために手作りした「天然のプール」でした。また、川浦川で魚捕りをする子もおり、当時は、手づかみでどれだけでも魚が捕れました。

水の冷たさ、夏の暑さを体全体で感じながら遊び、夏の間に背中の皮が2回むける子もいました。



（昭和39年7月31日撮影）

「手作りのプール」

夏休み、子どもは午前の涼しいうちに家の手伝いをし、昼食を済ませると、午後からは、毎日のように水遊びをしました。中学生くらいのリーダーの子をはじめ、みんなで一緒に泳ぎに行きました。学校にはまだプールがありませんでした。

（昭和43年8月16日撮影）